



N P O 法 人
ほっかいどう学
推進フォーラム



理事長

新保 元康 (しんぼ もとやす)

1958年小樽市出身。82年北海道教育大学札幌分校卒業。小学校勤務とともに、北海道社会科教育連盟や北海道雪プロジェクト等に長年参画し、地域教材を多数開発。また文部科学省の情報化推進事業の各種委員も歴任。2019年屯田小学校長を定年退職。8月からNPO理事長として活動を本格化。

ほっかいどう学インフラツアー —炭・鉄そしてダムの旅—

NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム

念願のほっかいどう学インフラツアーをついに実施することができました。

今回は10月10日に国土交通省北海道開発局札幌開発建設部主催による空知方面のインフラツアーのご報告をします。

勉強させていただいたのは、砂子炭鉱三笠露天掘坑、新桂沢ダム、そして旧幌内炭鉱周辺です。今回は、コロナ禍の中での開催と言うことで、学校関係者の会員に絞ってご案内をさせていただき、少人数での中身の濃い研修となりました。

参加者の皆さんの声から、「教師が北海道を知る」「教師がインフラの意味を知る」こうした機会が本当に少ないことを改めて実感しました。教師が知らなければ、子どもが知るよしもあります。教育関係者向けのインフラツアーの価値を再認識する機会ともなりました。実際の様子からご報告します。

1 砂子炭鉱三笠露天掘坑

一言で言えば、スケールの大きさに圧倒される見学でした。

約150ヘクタールの露天掘り、とにかく広大。これを一度に視野に入れるのは不可能です。首が痛くなるほどの見上げるような巨大重機の数々、細やかな安全への配慮の中で、慎重かつ豪快に土石を動かします。

石炭を含む炭層の薄さに驚きました。掘り進んだ斜面を見ると石炭を含んだ黒い炭層はわずかしきありません。聞けば、13トンの土石を動かして、ようやく1トンの石炭を得られるぐらいなのだとか。この薄い炭

層も丁寧に剥ぎ取り、製品として出荷するそうです。

こうした壮大な光景を見ながら、昔のことを想像してしまいました。

昔はこの薄い炭層にたどり着くまでに、地表から穴を掘り進んでいたのですから信じられません。何しろ、深ければ深いほど熱と圧力によって良い石炭が手に入ります。ここの露天掘りは地表から約160メートルまで掘り進んでいましたが、旧幌内炭鉱は、深い立坑を掘り、1989年の閉山時には地下1200メートルで採炭していたそうです。なんとも気の遠くなる深さです。ちなみに、ここの露天掘りの炭層からは昔使っていたトロッコ等が出てくることもあるそうです。

驚きは続きます。

まず、露天掘りが終了した後は、そこを埋め戻して元通りに復元するという事です。しかも、市町村の境界線に変更が起きないように、以前の稜線通りに埋め戻すのだそうです。さらに、元々の植生と同じように緑化復元も行うというのですからびっくりです。自然を少しでも損なうことが無いように、そしてまた、一件の事故もないように細心の注意のもとで作業が進められているのがよく分かりました。

ドローンが当たり前のように積極的に活用されているのも印象的でした。最新型のドローンで、徹底的な測量を実施、地形データを3次元化し、そこにボーリング調査のデータを加えて炭層データを可視化。つまり、どこをどれだけ掘れば良いかが分かるというのです。「炭鉱」は、もはや最先端の技術の場であること



巨大な重機が、安全第一で非常に繊細な作業を行っていました

がよく分かりました。

思えば、胆振東部地震のブラックアウトの時に大活躍したのがここの石炭と石炭発電所でした。地球温暖化という大問題の中で、石炭を取り巻く環境は大変厳しい状況です。しかし、地元でこうしたエネルギー源を持っている心強さを改めて感じる事ができました。

2 新桂沢ダム

日本の食料生産を支える石狩平野。今は、見渡す限りの水田と畑が広がっていますが、かつては、言わば湿原と言ってもよいほどの状態だったといいます。さらに、毎年のように発生する石狩川の洪水。この石狩川の治水は、正に北海道の命運をかけた闘いであったのだと思います。

この石狩川水系に昭和32年に作られたのが桂沢ダ



想像以上に薄い炭層に驚く



巨大な重機に圧倒されました



物言わぬダムがわたしたちの日常を支える

ム。北海道で初めての多目的ダムです。

昭和56年（1981年）の石狩川氾濫（観測史上最大規模の大洪水）を受けて、石狩川水系の治水対策が見直されましたが、その1つがこの桂沢ダムのかさ上げというわけです。

「かさ上げ」というのは、元々のダムを残して、そこに高さ10.9メートルかさ上げするという事です。環境を守りながら、少しでもコストを削減し、さらには早く治水の効果を実現するためにこの方法が採られたそうです。これで、ダムの総貯水量は1.6倍になるそうです。

参加した教員のみなさんは、ダムを間近に見たのは初めての方が多く、札幌開発建設部のみなさんの説明に興味津々でした。わたしたちの当たり前の日常を静かに守るダム。その裏側にあるものが見えてきた見学となりました。

これだけの規模のインフラの整備には数十年単位の時間がかかることも再認識。環境への配慮はもちろん、コスト、技術…様々な要素を計算に入れながら作っていくのだということがよく分かりました。



旧幌内炭鉱変電所

3 旧幌内炭鉱周辺へ

最後に、旧幌内駅、旧幌内炭鉱変電所、そして幌内神社本殿跡をみんなで巡ってきました。夕暮れも近く、すっかり森に囲まれ静かな空気を迎りが包みます。

幌内神社本殿はすっかり姿を消し、本殿への石段や、石の灯笼等が寂しく残るのみ。旧抗口も近くにあり、この辺一帯が、正に近代日本の熱源だった訳です。しかし、今やその気配はまったくありません。苔むした本殿跡、その冷え冷えとした静寂さに、ただただ息をのむばかりでした。

「お正月には初詣の人たちであふれかえっていたのですが…」としみじみ語ってくれたのは、案内して下さった砂子組の近藤さん。子どもの頃、この幌内にお住まいだったそうです。記憶に深く残る幌内全盛期の賑やかさ、その影にある悲しみの数々、たくさんのお話に聞き入ってしまいました。

昔の炭鉱には、本当にいろいろな人生が交差し合う場であったのだと思います。命がけの仕事に向かった人たちがいたからこそ今の平和と豊かさであることを思う時間となりました。

このツアーに参加した先生たちは、「初めて知ったことばかり、参加して本当に勉強になった。」「なんとなくは知っていたが、実際の様子を見て、改めて北海道の魅力、奥深さを知ることができた。」「また機会があれば参加したい」との声をいただきました。

ツアーを主催し、わたしたちの矢継ぎ早の質問にも丁寧にお答えいただいた北海道開発局札幌開発建設部のみなさん、砂子組のみなさん、本当にありがとうございました。



朽ち果てた旧幌内神社本殿跡

*国土交通省北海道開発局が中心となって進めている「ほっかいどう学」については、以下に情報が掲載されています。

<https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/ki/keikaku/splaat000000ozs0.html>